



TITLE:

<3>大学院生のための教育実践講座 :大学でどう教えるか

AUTHOR(S):

CITATION:

<3>大学院生のための教育実践講座:大学でどう教えるか. 京都大学高等教育叢書 2007, 25: 91-118

ISSUE DATE:

2007-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54055>

RIGHT:

Ⅲ．大学院生のための教育実践講座

－大学でどう教えるか－

Ⅲ．大学院生のための教育実践講座 －大学でどう教えるか－

1．はじめに

「大学院生のための教育実践講座」は、大学教員をめざす京都大学の大学院生のために、教員への自覚的自己形成にきっかけを与えることを意図して、計画されたプロジェクトである。GP プロジェクト「相互研修型 FD の組織化による教育改善」の一環として、高等教育研究開発推進センター第 1 部門が、学生部教務掛の協力を得て、平成 18 年 8 月 7 日に時計台記念館において実施した。今年度は、昨年度に続く第 2 回目であった。

日本では、他大学において TA（ティーチング・アシスタント）研修が実施された例はあるものの、このように院生を対象とした研修は、稀有な試みであり、京都大学が教育面で社会的応答責任を果たそうとする試みの一環といえるものである。

当日の構成は、総長の挨拶から始まり、ミニ講座、討論、ボディー・ワークなど合計 8 つのセッションが用意され、長時間にわたる密度の濃い研修が実施された。全学の大学院生と臨時の参加者たち 19 名が積極的に参加し、修了式では総長名の「修了証」が授与された。昨年度と同様に、この講座についての事後アンケートや院生を交えた検討会での評価は、きわめて高いものであった。

1－1．企画目的

京都大学において、特色 GP の一環として、「大学院生のための教育実践講座」が企画された理由は、大きく以下の 2 つにまとめられる。

第 1 に、京都大学は、旧帝国大学の流れを汲む長い歴史を経て、多くの分野で膨大な研究成果を生み出してきたことから明確なように、研究に重きを置く大学院大学である。とくに、近年の「大学院重点化」以降は、その傾向がさらに強くなっているといえる。したがって、在籍する大学院生の多くは、将来的に高等教育の教育職に従事することを目指すものが、かなりの割合になる。しかしながら、現状では、それらの人々に対する教育実践のための準備教育は、ほとんどなされていないのが実情である。したがって、この現状を改善するために本企画を実施することは、京都大学がその社会的責任を果たすという点で重要になってくるのである。

第 2 に、これまで京都大学の FD では、ほぼ毎年実施されてきた全学の教員を中心とする「全学教育シンポジウム」を除くと、全学規模の企画は存在していなかった。各部局でトップダウンで企画される教育調査、教育評価、講演、公開授業などのプロジェクト、私たちのセンターが企画した公開実験授業、公開研究会、大学教育研究フォーラムなどのプロジェクトなどがあるにすぎなかったのである。しかしながら、今年度から各研究科の代表者を集めた「FD 研究検討委員会」が発足したように（「I．はじめに」を参照）、相互研修型 FD は全学的な方向に展開されつつある。大学院生を対象にした本企画は、この展開に沿うものとして重要な部分を担うと考えられる。

1-2. 実施の背景

海外に目を向けると、このような院生のための教育研修は、アメリカ合衆国などにおいていくつかの先行事例が報告されている。これに対して日本では、これまでこのような企画は、全学的かつ大々的には実施されてはこなかったようである。アメリカと日本では、互いの大学や院生のおかれる文脈に大きな違いがあるため、両者を同じように論ずることはできないが、大学院重点化が進行して時が経ち、このような企画がもっと実施されてもよいはずである。京都大学では、昨年度から実施されているが、同じく昨年度から、名古屋大学の高等教育研究センターにおいても、「大学教員準備プログラム」という名前で、大学院生（およびTA）を対象としたプログラムが始まっている(http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fds_pg.html)。京都大学と名古屋大学のそれぞれのプロジェクトは、企画内容も実施形態も、互いに大きく異なっているものの、時を同じくして、類似した企画が実施され始めたことには重要な意義があるといえるだろう。

日本の大学院生は、これまで教育者になるための訓練からはほとんど無縁なままに放置されてきた。そして、駆け出しの研究者としての徒弟修行をある程度終えた段階で、ある日突然、教壇に立たされることになるのである。ただし、正確に言えば、徒弟修行の階梯を昇るにつれて、TAなどを担当することで、しだいに何らかの教育責任を担うのが一般的であり、大学院生が教育訓練から完全に放置されているわけではない。しかしながら、このような「機能的な」養成メカニズムを別にすれば、大学院生は「意図的な」研修からは疎外されてきたのである。そのため、一般的な大学院生が、「意図的かつ自覚的に」用いることのできる教育の方法は、それらの院生が「無意図的な体験」を通じて獲得してきた雑多な知識技術だけに限られることになる。言い換えれば、自分たちが「教えられてきたように教える」他はなかったのである。

本講座の企画は、こうした「放置のメカニズム」を超えて、院生の教育力の養成をめざそうとすることにある。教育者としての養成は、本来であれば、研究者としての養成と拮抗しうるような時間とコストをかけてなされるべきであるかもしれない。しかしながら、このような体系的な養成を試みる準備態勢は、まだ明確には存在していないといえるだろう。そこで本講座では、大学院生が自分たち自身を教育者として自己形成していく努力に対して、基盤と方向付けを与えることを企図した。

本研修は、「相互研修型FDの組織化」をめざすプロジェクトの枠内にある。したがって、この「研修」も伝達講習ではなく、自己研修、相互研修としてなされることになる。具体的には、本講座では、「ミニ講義」と「ディスカッション」とを一つのユニットとする基本的構成を取ることにした。すなわち、一方通行の講義を受講生たちの集団的な自省とつなぐことを意図した。さらに、教育者としての自己形成を、単に頭の中のレベルで行うだけではなく、知的・意志的な形成を支えるべき身体性のレベルでも行うようになることをめざした。そのために、ボディー・ワークを、セッションの中核に位置づけた。昨年度は、このような研修の意図や構成は、院生の事後評価や反省会での議論などを見る限り、かなり肯定的に受け容れられた。したがって、今年度も、基本的に昨年度と同じ枠組みで進めることにした。

2. 実施概要

実施時期

2006年8月7日（木） 10:00～18:30

実施会場

京都大学百周年時計台記念館 2F（3分割された国際交流ホールの2部屋と、小・中会議室を3部屋使用した）

参加費用

2,000円（ランチ・終了パーティ代を含む。当日、受付で徴収）

参加者

今回実施された講座への最終的な参加者は19名（男性11名、女性8名）であった。なお、事前申込の段階では26名（男性17名、女性9名）であった。理系と文系に分けた上で、その内訳の詳細を表1に示す。

表1 参加者の内訳

理系 (15名)			文系 (4名)		
部局	人数	課程	部局	人数	課程
理学研究科	4名	修1 / 博3	文学研究科	1名	PD1
医学研究科	8名	修4 / 博4	教育学研究科	1名	博1
農学研究科	2名	修1 / 博1	経済学研究科	1名	博1
情報学研究科	1名	博1	他大学文学部	1名	その他

実施プログラム

資料1を参照

グループ構成

今回の講座では、参加された院生同士のディスカッションの場を2回設けている。そこで当センターの側で協議を重ねた結果、教育・研究に対する文化的背景が異なることを考慮して、理系と文系を分けて構成した。各グループの構成人数は、理系の院生によって構成されたグループ1が6名、同じく理系の院生によって構成されたグループ2が7名、文系の院生によって構成されたグループ3が6名であった。なお、それぞれのグループには、リーダーとなる院生を置くとともに、センターの教員が1名ずつファシリテーターとして入り、議論の進行をコーディネートした。

3. 事前アンケートの結果

本講座を実施するにあたり、あらかじめ参加希望者に事前アンケートを郵送し、回答をお願いした。これは、参加を希望する学生がどのような経緯で本講座を知り、どのような動機や期待を抱いているのかといった点を把握すること、およびグループに分かれてディスカッションを行う際のグループ分けの判断材料とすることを目的として行った。質問事項は、基本的に昨年度とほぼ同様のものとした。なお、この事前アンケートの有効回答数は26名中19名（男性12名、女性7名／修士5名、博士13名、PD1名）であった。

3-1. 本講座を知ったきっかけ

まず、どのようにして本講座を知ったのかということについて調べるために、「この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）」という質問を行い、表2にある7項目を選択肢として設けた。

表2 講座を知ったきっかけ (N=19)

項目	人数(名)	割合(%)
①指導教官から	5	26.3
②その他の教員から	2	10.5
③友人から	2	10.5
④大学のHPで	4	21.1
⑤センターのHPで	1	5.3
⑥掲示板で	3	15.8
⑦その他	3	15.8

①と②はいずれも教員から知らされたものであり、両方を足すとおよそ4割近くにもなる。④の大学のHPから情報を得た人も多かった。①と④の両方から情報を得た人も存在した。⑦の「その他」には、「電子メール」という回答が多かった。これは所属事務や学内のメール等によるものと考えられる。

3-2. 本講座の受講動機

次に、本講座を受講しようと思った動機について、「どうして、この講座を受講しようと思いましたか？」という質問のもと、自由記述で回答を求めた。その結果を表3に示す。

全体的な傾向として、研究科の違いに関わらず、(1) 何らかの形で自分たちがこれから大学教員として教育を施す場面に遭遇するということ、(2) それは研究とは違った知識やスキルが必要であるということ、(3) そういうこと（主として Teaching の側面）について、しっかりと考える機会としたいこと、などがあげられていた。

表3 講座の受講動機に関する自由記述（参加希望者26名中17名が回答）

所属部局	課程	記述内容
理学	修	他の研究科の教員志望の方と意見交換が出来る貴重な機会であるから。興味深い講座がいくつかあるため。
理学	博	「教え方」について興味を持っていたから。聞く側の立場からみて、どのような「教え方」に対して聞く気になるか、を考えたい。
理学	博	教職はとっていなかったが、教育には興味がある。
理学	博	研究発表とは異なる講義の方法、考え方について、話を聞きたいと思ったので。
医学	修	現在、専門学校で講師をしているが(約7年間)、教育について学んでみようと思い、大学での教師についても考える機会を得たいと思った為。
医学	修	専門学校の教員として勤務しているが、「教育」について改めて考えたいと思ったため。
医学	修	「教育する」ということの教育は受けたことがなかったので、一度受けてみたいと思いました。
医学	博	将来、自分が一人前となり研究室主任者となった際、研究と教育とのバランスをどのように保つべきか、また、高いレベルでの研究を維持する際、犠牲になりやすい教育に対してどちらも維持していく方法などを学びたいと考えたためである。大学の持つ二大義務について周りの方の意見を聞いてみたい。
医学	博	他分野の人と交流もでき、また将来大学教員として働くための「イロハ」が教われそうだったので受講することにしました。
医学	博	大学教員の他の可能性であれば、経営コンサルタントや会社役員(技術担当)などに就く可能性があるが、いずれにしてもプレゼンテーション力、コーチング力の強く期待される職業であり、トレーニングの必要性を感じた。
医学	博	アカデミアの研究職を志望するにあたり、教育に関する知識を得たかったから。
農学	修	将来、大学教員になるにあたっての何らかの能力を身につけたかったのだ。
情報学	博	自分が教員になる前に、このような教育をうけたことがない。自分の反省の材料にしたい。
文学	PD	非常勤をして実際に抱くことになった問題を解決するための手がかりが得られな いかと考えて、希望しました。
教育学	博	いつか役に立つかもしれないので。
法学	博	近い将来、教員になる可能性があるため。以前から教育に関心があるため。
経済学	博	大学教員の公募面接では模擬授業があるのですが、非常勤講師の経験もなく、 困っています。それが主たる受講申込理由です。

3-3. 本講座への期待

さらに、本講座に対してどのような期待を有しているのかについて、「この講座にどんなことを期待していますか？」という質問のもと、自由記述で回答を求めた。その結果を表4に示す。

表4 講座への期待に関する自由記述（参加希望者 26 名中 13 名が回答）

所属部局	課程	記述内容
理学	博	教える立場に立ったとき、どのような事に対して気を配るべきかについて、考える基礎を得たい。
理学	博	具体的な「コツ」と共に、講義に関する考え方について、さまざまな側面から教えて欲しい。
理学	博	具体的にはわからないが、今後の役に立てばと思っている。
医学	修	教育について、教える側—教えられる側の双方向から、教育を捉えられるような機会を持てたらと考えています。
医学	博	一方通行の授業形式ではなく、双方向の意見交換ができる討論の時間があるので、教育に対する色々な意見を聞くことができることや、自分の意見を述べられる場が持てることが楽しみです。
医学	博	グループワーク、実演プレゼンテーションと指導。教育効果測定法、教材の作り方、連続講義の組み方。
医学	博	大学生以上を対象にした、専門的な事を教えるにあたってのコツやノウハウなどを身につけられたら嬉しいです。
医学	修	今現在教員をなされている方への教育についてもあってもよいのではないかと思います。
農学	修	講義がもう少し、具体的内容（大学教員として必要な能力、素養などを学問的視点から）にしてほしい。このようなイベント的なものでなく、1年間の定期プログラムといったものに昇格させてほしい。
文学	PD	大学での一般教養科目の教育方法論や、名古屋大学の高等教育研究センターが公開するティーチングティップスの内容に近いもの（たとえば大学教育で効果的な授業の進め方）を学んだり、話しあいを通して考えたりすることを期待しています。
教育学	博	授業での評価の仕方（レポート、試験etc）、プレゼンテーションの仕方（レジュメ、power point etc）についてきいてみたいです。特に、レポートの文献としてネット情報をどう扱うかや、ネットと授業のつきあい方について。その他、色々なトピックについてきけると有難いです。
法学	博	学生の関心をひきつける講義の仕方、さががしくなった時の対処法、大学の役割と関連付けた大学教育のあり方などを勉強できればと思っています。
経済学	博	実際に初めて教壇に立ったときにどのように教えればよいか、という実践的なテクニックの伝授を期待しております。

全体的な傾向としては、(1) 大学教育に関する関心や、どのように進められるべきなのかといった「大学教育に関する情報・知識」の獲得、(2) 大学での授業を具体的にどのように進めていくことが望ましいのかといった「授業方法に関する知識」の獲得、(3) 他の大学院生の意見を知りたい、ディスカッションを通じて意見交換し問題意識を共有するといった「関係づくり」、などがあげられていた。とくに、具体的な授業方法に関するノウハウ的なものを求めている院生が比較的多かった。

4. 事後アンケートの結果

本講座を実施直後に、今後の改善につなげるために事後アンケートを実施した。参加満足度や各プログラムに対する有意義度および改善すべき点について、評定と自由記述をもとに構成した。質問事項は、基本的に昨年度とほぼ同様のものとした。

4-1. 本講座の全体的な満足度

本講座の全体的な満足度について、「本研修への参加満足度は全般的にどのようなものですか。」という質問に対し、「5. 非常に満足している」から「1. まったく満足していない」までの5段階で評定を行った。その結果を図1に示す。参加者全員が、「5. 非常に満足している」または「4. まあまあ満足している」のいずれかであり、本講座に対しかなりの満足感を抱いてもらった。なお、平均得点も4.53（昨年度は、4.40）と非常に高かった。タイトなスケジュールであったにも関わらず、参加した院生からは高い評価が得られた。

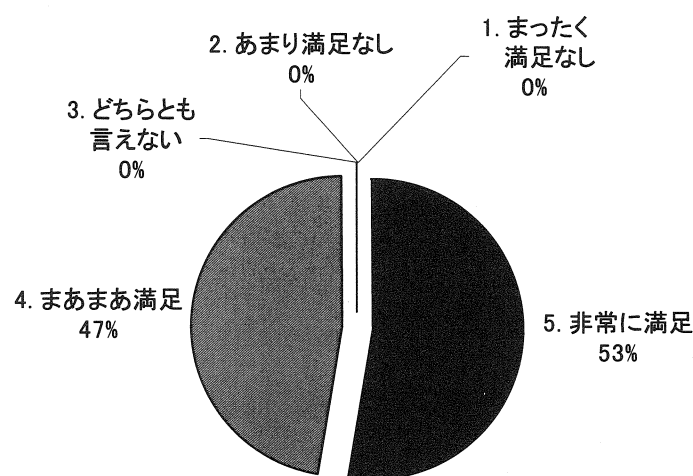


図1 本講座に対する満足度

4-2. 本講座の満足度を規定する要因

評定値から見た本講座の満足度は非常に高いものであったが、以下では、それを規定する要因（理由）について、自由記述をもとにみている（表5を参照）。

全体的な傾向として、(1) 院生や教員からさまざまな意見や考え方を聞くことができたということ、(2) 大学教育の現状について知ることが出来たということ、などがあげられていた。

これらのことは、事前アンケートの受講動機や期待することで書かれていたことに基本的に対応していることから、高い満足度に現れたと考えられる。ただし、授業方法という点では、おそらく本講座の主旨と参加者側の期待とは少し異なっていたことが想定される。しかし、この点はそれほど否定的な評価の対象にはなっていなかった。

表5 参加満足度の理由に関する自由記述（参加者 19 名中 18 名が回答）

所属部局	課程	記述内容
文学	PD	グループの方々に、共通の問題意識のもと、議論が出来る方が多かった。その上でファシリテーターの方の適切な方向づけを介して、十分な話し合いが出来たから。ボディワークも他者との関わりを考えるうえで有意義なものだったから。
文学（他大学）	その他	これから大学教育を研究する上で問題点が明らかになった。
臨床教育学	博	企画自体がユニークであるし、内容的にも生産的であり、体験（body work）を基底におく等有意義かつ参考になった。
経済学	博	今回は初めて教育について検討させていただき勉強になりました。
理学	博	現在の大学教育の問題、またそれについての様々な意見に触れることができとても満足しました。講座の形式もとても効果的だったと思います。
理学	博	自分の考えと、同じ考え方を他の人も持っていることがわかったことも、違う考えに触れたことも非常に新鮮に感じられた。普段思っている、改まって議論する場がない話題だけに、違う環境、立場の人と話し合えたことはとてもプラスになった。
理学	博	教育学にほとんど知識がなくても深く考えさせられることが多かったので、自分が教員になったときにもう一度考えることの材料になると思う。
理学	修	日頃漠然としか考えることが出来なかった「教える」という問題に対して議論ボディワークを通じて考えるきっかけとなりました。まだ私は研究の身であり、教育の現場に立つことは先のことであると思いますが、今回の経験は比較対照を行うための重要な材料にしたいと思います。
医学	博	グループ討論とミニ講義のバランスがよかった。異なる研究科の学生とディスカッションできたので多様な意見が聞けてとても参考になりました。
医学	博	①いろいろな話を聞くことができた（講義）、②いろいろな人の考えを聞くことができた（討論）、③ボディワークが楽しかった、④もう少し時間が欲しかった（討論）
医学	博	大学教育について同じ大学院生の話を聞いたのがよかった。自分の一番聞きたかった研究と教育のバランスについては、あまり論じられなかったのが残念だが、大学教育自体に決まった方向性はなく、ON GOINGである問題であることがわかり、今後も自分なりに考えていくきっかけになった。
医学	博	実際に教材を使ったり、カリキュラムを検討したりということも必要だと思います。「実践」講座を掲げておられるので、もっとアカデミックなものよりもプラクティカルなものを目指してはいかががでしょうか。
医学	修	他グループの方々ともう少し交流があるとよかった。
医学	修	様々な研究分野の方と討論できたこと。机上の問題のみならず、フランクの教育問題等実際に生じている大きなテーマについて討議出来たこと。
医学	修	期待した以上に好奇心をかきたてられる時間でした。「教える」ということを学んだり考えたりすることは今まで無かったので、とても有意義でした。またボディワークが、いろいろと応用のきくモデルでよかったです。
医学	修	様々な研究科の人の意見、また先生方から現状を聞き大変刺激を受けました。また一日の講義内容も臨機応変であり、講義自体が生き物のように感じ、積極的に参加できました。
農学	博	これまでグループ討論の経験がなかったが、今回はなかなか質の高い討論ができた点。ボディワークはこの講座に参加しないと経験することはなかった。通常の研究生生活では体験できない経験を積むことができ非常に満足している。
農学	修	ミニ講義の内容をもう少し充実してほしいです。（文献などでは知りえない最新の最先端の内容）

4-2. 各プログラムに対する有意義度

次に、本講座で施行されたプログラムに対する有意義度について、「プログラムについてどの程度有意義であったか、お答え下さい」という質問のもとに、(1) グループ討論、(2) ミニ講義、(3) ボディー・ワークの3つのプログラムそれぞれについて、「5. 非常に有意義だった」から「1. まったく有意義ではなかった」までの5段階で評定してもらった。

まず、「グループ討論」は、評定値の平均は4.68（昨年度は、4.42）とたいへん高い値であった。このプログラムでは、自由度を意図的に高めて、ある程度の議論の広がりが見込まれる大きなテーマのもと、2度に分けて、参加者の院生同士で議論してもらったが、グループリーダーやファシリテーターがうまく機能したことも一因として考えられるであろう。

次に、「ミニ講義」は、評定値の平均は4.47（昨年度は、4.58）と高い値を示した。このプログラムでは、センターの教員による「大学の授業」と題された講義2つと「大学で教えるために」と題された講義1つの計3つの講義が実施された。それぞれの時間は30分前後で、大学の現状やシステム、これから大学教員として必要となることなどが簡潔に提示された。大学院生にとって、大学の実情や大学教育の課題など、関心はかなりの程度ありながらもなかなか耳にすることのないような情報を得られたことが、高い有意義度に現れているものと思われる。

最後に、「ボディー・ワーク」は、評定値の平均は4.21（昨年度は、3.94）と最も低い値であった。このプログラムは、2時間ほど用意され、身体を使って「相手を信頼することの大切さ」など、教員としての資質の基底ともなる要素について学ぶことが企画されていた。残念ながら、本講座とボディー・ワークとの関連性や位置づけが明確に参加者に伝わらなかったことが、結果的に得点の低さにつながったものと思われる。

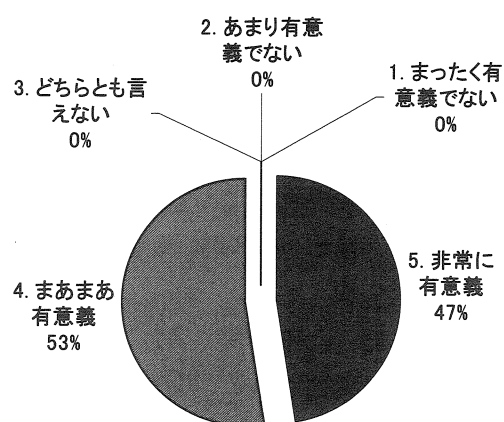


図2 「グループ討論」の有意義度

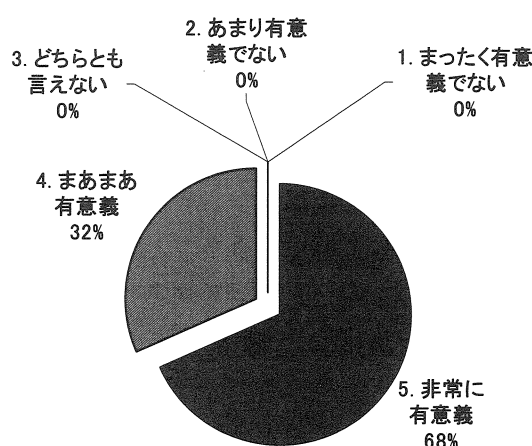


図3 「ミニ講義」の有意義度

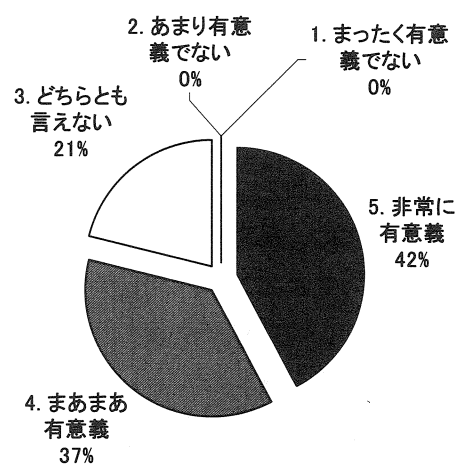


図4 「ボディー・ワーク」の有意義度

4-3. 今後の改善に向けて

続いて、今後の改善への資料として、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい」という質問を設け、自由記述による回答を求めた。その結果を表6に示す。

全体的な傾向として、(1) 1日では詰め込みすぎで、プログラムをもう少しゆったりと組んで欲しい、移動・休憩時間が欲しいなど、「時間配分」に関する点、(2) 技術的・スキルのなことについて教えて欲しいなど、「授業方法」に関する点、(3) 文系と理系を混ぜてグループを作って欲しい、全体討議で議論がかみ合わないなど、「グループ構成」に関する点、(4) ボディ・ワークの意義についての疑問など、「テーマ設定」に関する点、などがあげられていた。

これらは、昨年度の第1回の本講座の実施後にも挙げられていた点が含まれ、どれも検討するに値するものばかりである。今年度は改善した点もあったのであるが、不十分であったかもしれない。来年度は、さらに改善していく必要があるだろう。

5. 最後に

本講座は、京都大学の大学院生が将来大学で教えるために、大学院生時代に自覚的に自分自身を形成していくきっかけとなることをめざすという方向性を持ち、昨年度に引き続き、今年度はその2回目として実施された。わずか1日というきわめて限られた時間の中で、複数の「グループ討論」「ミニ講義」「ボディー・ワーク」「全体討論」といった計8つのセッションから構成された。講座の最後に、「総長名の修了証」を授与した。これは、教育業績の一環となるべく履歴書等にも書けるよう配慮されたものである。さまざまな課題・問題点はありながらも、参加した大学院生からは高い満足度・有意義度を得ることが出来た。

しかしながら、反省や改善の余地も存在する。第1に、今年度は当日の参加者がわずか19人しかいなかった。しかも、医学研究科など特定の研究科に偏っている傾向もあった。とくに、今年度は文系の参加者が少なく、理系と文系で比較して分析するといったことも困難となってしまった。「相互研修型FD」の基本的な性格は、それぞれのメンバーの状況性や文脈性に彩られた部分での交錯にあるため、できるだけ多様な参加者があってこそ、本講座の力が真に発揮できるのである。本講座は来年度も継続する予定であるため、できるだけ多様で多くの参加者を募るために、広報活動の根本的な改善が必要になってくるだろう。今年度についていえば、表2に示されるように、参加のきっかけは「指導教員から」という回答が相対的に高かった。逆にいえば、指導教員が非協力的であれば、大幅に参加者が減る可能性があったのである。一般的な大学院生が自発的に情報を得る機会を増やす方法を考える必要があるだろう。

第2に、研修後のフォローシステムの欠如を改善する必要もあるだろう。意図的に1日に固めることは有益な点も多いが、感想をみると、トイレに行く暇もなかったという記述もあった。やはり何日かに分けて、前回の議論を再検討する時間を設定し、再び議論をさせるとさらによいことであろう。教育心理学では、何かを学ぶときには、集中学習より分散学習の方が一般的

表6 今後の改善点に関する自由記述（参加者19名中17名が回答）

所属部局	課程	記述内容
文学	PD	募集の仕方にもう工夫いるように思われます。参加人数が多すぎるのも、一体感を作り上げる上で、少し問題かと思いますが、より多くの方の意見を聞くうえでもう少し参加者を増やしていただきたいです。
臨床教育学	博	やはりタイムスケジュールにもう少し余裕があると（トイレに駆け込む）とも思いますが、講義が抑えられた構成はよかった。もっとアピールされてもいいと思います。もったいない！
経済学	博	大局的な「そもそも論」に加えて、小手先の「ハウツー論」も充実させればベストだと思います。
理学	博	ボディワーク→まだ自分でよく消化できていないので、もちろんとても有意義だったと思います。もう少しだけ議論の時間が長ければと思います。
理学	博	①ボディワークの位置づけが今一つはっきりしなかったと思う。コミュニケーションを肌で感じるという意味は理解できるが、大学で教えることは直接関係ないと思う。 ②教育上ぶつかる問題は、議論されたと思うが、抽象的な議論になることも多かったように思う。たとえば模擬授業などで、いろいろな場合を想定しながら考えたほうが面白い例があがったのではないかな？
理学	博	グループ討論ではメンバーにもめぐまれた。現在の宣伝だと元々意識の高い人が多かったからだと思う。しかし講座自体はもっと多くの人が受けるべき内容であるので、宣伝体制を考えたいほうが、より多様な人材が集まり、さらに有意義なものになると感じた。
理学	修	非常に綿密な準備をしてくださり、特に無いと思います。個人的な趣向だとは思いますが、事前にとどのようなことがあるのかをHPで詳しく説明していただければ、と少し思いました。ありがとうございました。
医学	博	ボディワークは非常に面白かったですが、その内容（1時間）を教育にどれくらい取り込めるか、自分で全部吸収できなかった感があるのが残念でした。もしかしたらボディワークも2部にわけた方が受講者側も吸収しやすいのかもしれない。スタッフの皆さん 1日暑い中お疲れ様でした。
医学	博	①時間の配分を討論にもう少し割り振る。 ②参加人数は少なかったがこれくらいの人数の方がまとまりは出来るのかなあ？と思いました。1日だけでは短すぎるので、また参加できる講座を開いてほしいです。
医学	博	今回のセミナーで問題提起などは多く行われ、現在大学教育が抱える問題については考えるきっかけをいただいたが、それに対して明確な方向性を指示してもらえず、今後どのような大学教育について考えていったら良いかわからない感が残った。今回は教育とは難しいと感じたが、こうすれば良いというヒントが得られなかったのが残念。
医学	博	・短い ・この講座を終了した人向けのアドバンス講座も欲しいです。（やはり短いので、、、、） ・文系、理系を特に意味なくグループ分けすること。 ・もっとしっかり宣伝してください。
医学	修	・グループの人数が少なく（5名）もう少し多くの方々とディスカッションすることができたらよかったと思った。 ・学会発表ではないので、質問者の質問を打ち切ってまで、制限時間にこだわることはなかったと思う。
医学	修	ボディワークの内容は充実していましたが、全体のプログラムの中での時間が少し多く感じました。合宿形式などでも面白いのではないかと思います（どのくらいの参加者が集まるかわかりませんが、他大学などを含めるともっといろんな討議ができるかもしれません）。
医学	修	①トイレ休憩は欲しかったかも？ ②グループは文系、理系が混ざっている方が、異分野交流できてよいのでは？ ③修了生のネットワークを（OB会みたいなもの）があっても楽しいかもしれません。 ④もっと他の人にも受講してほしい。宣伝します。 ⑤プログラム作り大変だったと思いますがお疲れ様でした。また今後も交流させていただけたらうれしいです。
医学	修	テンポよくグループワークと講義が組まれていたので煮つまることなくできたと思います。現在教える側として、こんなところに問題を感じるということ具体的に聞く時間があっても良いと思いました。
農学	修	・1年に3回ほど本講座を拡充してほしい。イベントで終わらせるには「もったいない」企画 ・そこでは継続的な内容にしてほしい。 ・ミニ講義の内容を充実してほしい。
情報学	博	休憩時間があつたほうが良いと思います。

に良いことが知られている。心理学に限る必要はないが、このようにさまざまな学問の理論的知見も取り入れていくことで、本講座はさらに良いものへと発展できる可能性を秘めていると思われる。今後は、考えられる課題・問題点について吟味・検討し、より京都大学の教育に貢献しうる活動としていきたい。来年度は、さらに充実した内容のものとする予定である。

資 料

平成18年5月18日

大学院生指導教員各位

理 事 東 山 紘 久

「大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—」
の開講について

標記講座を別紙のとおり実施いたします。この実践講座は、京都大学の大学院生が将来大学で教えるために、大学院生時代に自覚的に自分自身を形成していくきっかけとなることを目指し、高等教育研究開発推進センターが主体となって実施するものです。

この講座の実施には、単に大学院生個人にとってばかりではなく、京都大学にとっても大きな意味があります。京都大学の大学院生は、将来、全国で大学教員となる見込みも高く、従って、このような研修を実施することは、京都大学がその社会的責任に応えることでもあります。さらに、この研修を実施することは、TAの担い手でもある大学院生といういわば「ボトム」から京都大学の教育を改善することにもつながります。

何卒この趣旨にご賛同いただき、先生にご指導いただいている大学院生の参加を強くお勧めいたしますよう、お願いいたします。

おって、本講座の案内及び参加申込書は、「京都大学ホームページ」にも掲載しておりますことを申し添えます。

「大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—」

この実践講座は、京都大学の大学院生が将来大学で教えるために、大学院生時代に自覚的に自分自身を形成していくきっかけとなることを目指し、高等教育研究開発推進センターが主体となって開催します。

開 講 日： 平成18年8月7日（月）

場 所： 京都大学時計台記念館

参 加 費： 2,000円（当日、受付で徴収します。）

参加人数： 60名程度

申込締切： 平成18年6月30日（金）

申込方法： 別紙様式によりメール、またはFAXで申し込んでください。

申 込 先： 京都大学学生部教務課教務グループ（教育改革等支援担当）

メールアドレス： gaku-kyomu02@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

F A X 番 号： 075-753-2485

〔プログラム〕

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 9時00分～ | 受 付 |
| 10時00分～ | 開会式 |
| | 挨拶 京都大学総長 尾池 和夫 |
| | 趣旨とプログラムの説明 |
| | 高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作 |
| 10時20分～ | 移 動 |
| 10時30分～ | セッション1 |
| | グループ討論1：（自己紹介）「大学の授業について」 |
| 11時30分～ | セッション2 |
| | ミニ講義1：「大学の授業1」 |
| | 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代 |
| 12時00分～ | セッション3 |
| | ランチと自由討論 |
| 13時00分～ | セッション4 |
| | グループ討論2：「大学の授業で教師に求められるもの」 |
| 14時00分～ | セッション5 |
| | ボディーワーク：「他者とのつながり・自分とのつながり」 |
| | 京都文教大学教授 濱野 清志 |
| | 高等教育研究開発推進センター助教授 大山 泰宏 |

- 15時50分～ 休憩
- 16時00分～ セッション6
ミニ講義2：「大学の授業2」
高等教育研究開発推進センター助教授 溝上 慎一
- 16時30分～ セッション7
全体討論：「大学で教えるために」
- 17時30分～ セッション8
ミニ講義3：「大学で教えるために」
高等教育研究開発推進センター教授 田中 每実
- 17時50分～ 閉会式
挨拶・修了証授与 京都大学理事 東山 紘久
- 閉会式終了後 パーティー（18時30分まで）

〔その他留意事項〕

1. 当日は、ボディーワークを行いますので、動きやすい服装・靴で参加してください。
2. 参加申込書等は、「京都大学ホームページ」に掲載しております。
http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_event/2006/060807.htm
3. ランチ、パーティーは参加費から準備します。
4. 昨年の講座の雰囲気は下記のURLをご参照下さい。
http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/gp/gp_inseikoza.html

大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—
参 加 申 込 書

(平成18年度)

氏 名				
所 属	(研究科名)		(専攻名)	
	(修士・博士区分)	修士 ・ 博士	(講座名)	
指導教員名				
連 絡 先	(住所)	〒		
	(電話)			
	(E-mail)			

メールアドレス gaku-kyomu02@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

FAX番号 075-753-2485

申込締切 平成18年6月30日(金) 期限厳守

※参加申込書は、「京都大学ホームページ」に掲載しております。
http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_event/2006/060807.htm

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」
事前アンケート

高等教育研究開発推進センター

このアンケートは、本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、上記の目的以外に使用することは決してありませんので、よろしくご回答のほどお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____ 研究科 (1.修士 2.博士) 課程

学年：1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年以上 5. PD など

問1 この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）

- ① 指導教員から ② その他の教員から ③ 友人から ④ 大学のHPで
⑤ センターのHPで ⑥ 掲示板で ⑦ その他（ ）

問2 大学での教育経験はありますか？ある方は行っている年数もお答え下さい。（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）

- ① なし ② TA（約 年） ③ 非常勤講師（約 年）

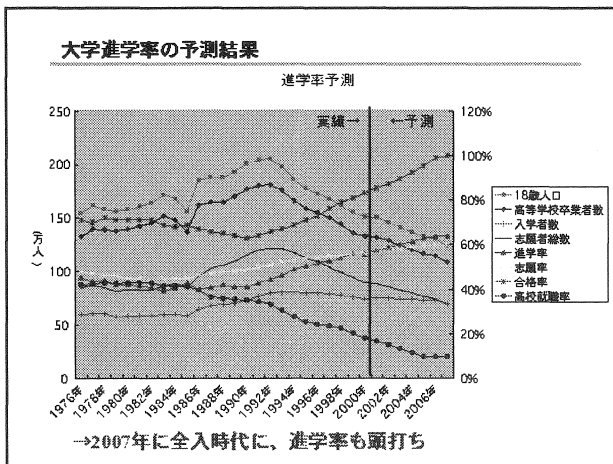
問3 大学教員になることをどの程度希望していますか。（あてはまるもの1つに○をつけて下さい）

- ① 強く希望している ② 希望している ③ まだ分からない
④ 特に希望していない

問4 どうして、この講座を受講しようと思いましたか？

問5 この講座にどんなことを期待していますか？

ご協力ありがとうございました。



2.3 二つの“問題”

- エリート段階→マス段階
 - 第一次ベビーブーム世代
 - 大学紛争(1960年代末)
- マス段階→ユニバーサル段階
 - “2007年問題”
 - =大学全入
 - “2006年問題”
 - =「ゆとり教育」「学力低下」世代の入学
 - 「大学の学校化」「高等普通教育化」

8

2.4 大学内・大学間の格差拡大

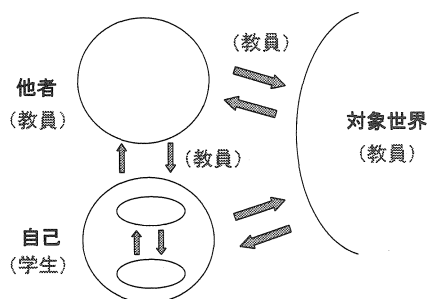
- 大学内
 - 学生の多様化
 - …学力格差、学習意欲格差の拡大
 - 大学間
 - 大学の種別化
 - 研究大学
 - 教育中心大学
 - “Fランク”
- ↑ ↓
- あなたの就職する大学はどんな大学だろうか？

9

3. 授業者として求められること

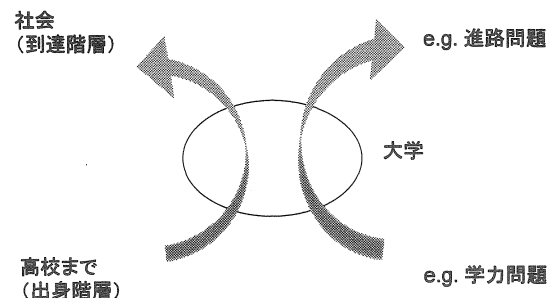
10

3.1 三つの関係に着目する



11

3.2 学生の〈学びの履歴〉を考える



12

3.3 学生の“声”を聴く

- <学生としての自分>とは異質な学生に教える
- 学生とのディスコミュニケーション
 - 統制?
 - 閉じこもり?
- ↓
- 学生の“声”を聴く → 対話
 - e.g. 「何でも帳」 何でも帳.pdf
 - 教員と学生のインタラクション
 - 学生同士のインタラクション
 - ポートフォリオ

13

3.4 自分の哲学とスタイルをもつ

- 学生の声を聴く
 - ≠ 学生の要求に応じる
 - …学生の多様な要求に応じることはできない(べきでもない)
 - …むしろ、自分の哲学とスタイルをもたないがために
学生の要求に対峙できないこと が問題
- 学生と教員とのズレ
 - 教育・学習について対話する絶好の機会
 - e.g. 京大ボケゼミ(平竹潤:有機化学)
 - …学期の中間に「学生による授業評価」(early evaluation)

14

4. あらためて2つのケースについて

— 知っておいてほしいこと —

15

4.1 修得主義と単位制度

～ケース1

- 履修主義と修得主義
 - 履修主義…履修すれば課程を修了したものとみなす考え方
 - * 小・中(・高)
 - 修得主義…課程の内容を修得したことで課程を修了したものとみなす考え方
 - * 高・大

16

■ 単位制度

- 1単位＝「45時間の学修を必要とする内容をもって構成する」



■ 実際

- 講義: 半期で2単位
 - 制度通りなら90時間?!
 - 実際はせいぜい15コマ

17

■ カラクリ

- ① 45時間＝授業＋授業外
(配分は大学ごとに決められる)
 - e.g. 講義: 15時間＋30時間 → 2単位で30時間
 - e.g. 実験・実習・実技: 30時間＋15時間
- ② 1コマ(90分)を2時間とみなす → 30時間で15コマ
- ③ 15コマきっちりやっていることにする
 - ↓
 - * 出席≠修得
 - 出席をどのくらい成績評価に入れるかは教員裁量
 - 自学をどう促すか?

18

4.2 学生消費者主義

～ケース2

■ 消費者メタファー

- 学生は、教育サービスを選択し、購入する消費者（あるいは顧客）
- 大学は、そのニーズを把握し、顧客満足度を高めるような教育を提供しなければならない
- 授業という商品の説明書および契約書としてシラバスが機能する
- 顧客満足度を測るために、学生による授業評価を実施する

19

■ 大学側

- 大学の経営問題
cf. 私立大の定員割れ：4割

■ 学生側

- 子どもの頃から、「Wスクール」の中で養われたサービスの受け手としての態度
not 消費者としての権利の主張

■ 消費者メタファーは適切か？

20

4.3 もう一つのメタファー

■ 製品メタファー

- 原材料として入学してきた学生は、大学教育によって加工され、付加価値をつけて社会に送り出される
- その製品の品質保証、あるいは製品を作り出すための教育プログラムの品質保証が必要になる
e.g. JABEE(日本技術者教育認定機構)

■ 製品メタファーは適切か？

21

■ 大学教育の課題

- 学生を能動的な創造者へと変えること
 - 対象世界との関係
 - 他者とのネットワーク
 - 自分自身のアイデンティティや将来への見通し

22

5. さまざまな試み

23

5.1 大学生らしい学び方を学ぶ

■ 初年次教育(導入教育)

- レポート作成、文献検索、ノートテキング、プレゼンテーション、図書館利用、時間管理、…etc.
* スキル先行 / 一般的な学習方法論

⇔ ポケゼミ

- * 内容も / 特定の学問分野の研究方法論

24

5.2 学習に見通しをもつ

- アーリー・エクスポージャー(early exposure)
 - 主に医学教育
 - 入学初期に臨床の場で体験実習
- 創成科目
 - 工学教育
 - 〈専門的な知識の準備なしに、具体的な目標のはっきりした、しかし解が多様に存在するような問題に学生を直面させること〉を通じて学ばせる
e.g. 卵落とし(名古屋大)

25

◆創成科目の例（徳島大学工学部）



出典：英 崇夫「進取の風風を育む創造性教育の推進」
(大学コンソーシアム京都第9回FDフォーラム、2004.2.24)

■ 両者に共通した考え方

- 自分の学んでいる学問が不可欠のものとして使われている現場にふれさせ、将来携わるであろうと思われる仕事の大まかな像を描かせる

→ ギャップを埋めるものとして、
専門の学習へ動機づけ

- 現在の自分の未熟さや専門的力量的不足を意識させる

27

5.3 講義はダメなのか？

- 知識を体系的に習得するための効率的な方法
(一見、学生には最もラクそうに見えるが…)
 - 授業に巻き込む力は弱い
 - 聞きながら理解・思考するのは困難
- 〈意味あるものになるには、高い能力と動機づけが要求される〉という認識が必要

28

最後に宣伝・・・

- センターのWebサイト「大学授業ネットワーク」に、さまざまな大学・分野の工夫された授業が紹介されています。
<http://www.highedu.kyoto.ac.jp/jkp/mokuji.htm>

29

大学院生のための教育実践講座 2006.8.2

大学の授業2

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター)

http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/mizo.htm
E-mail smizok@hedu.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

1

Contents

- 1. 学習成果の指標をどこへ
- 2. ヒドウン・カリキュラムという考え方

Presented by Dr. Shinichi Mizokami 2

【1】

さまざまな大学授業の現実

Presented by Dr. Shinichi Mizokami 3

● 大学の授業で学習成果を求める

- ・ 京都大学の場合
- ・ 京都大学以外の偏差値上位校
- ・ 中堅以下の大学
 - － テスト問題のつくり方に表れる現実の厳しさ

Presented by Dr. Shinichi Mizokami 4

【2】

ヒドウン・カリキュラムという考え方

Presented by Dr. Shinichi Mizokami 5

● 教育で育てている力:ヒドウン・カリキュラム (hidden curriculum)

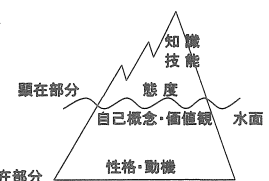
イギリス産業革命時の経営者の考え方

Ure, A. 1861 *Philosophy of manufactures, or, an exposition of the scientific, moral, and commercial economy of the factory system of Great Britain*

学校卒が身につけている能力

- (1) 時間厳守
- (2) 服従
- (3) 単純作業になれること

大卒と高卒との違い



【出典】小方直幸「コンピテンシーと大学教育の可能性」(2000) 6

●まだまだ足りないactive learning

EUA2004:

Quality Assurance: A reference system for indicators and evaluation procedures

卒業生と彼らを雇用する企業との両者によって大学の卒業生の専門上の進歩にとって重要だと考えられた17項目

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| (1) 異分野が存在するグループで仕事をする能力 | (7) 新しい考えを生み出す能力(創造性) |
| (2) 多様性と多文化を正しく認めること | (8) 新しい状況を受け入れる能力 |
| (3) 研究分野での基礎的知識 | (9) 学習能力 |
| (4) 職業における基礎的知識 | (10) 批評と自己批評の能力 |
| (5) 分析と総合の能力 | etc |
| (6) 実際に知識を応用する能力 | |

欧米では、lectureとセットになっておこなわれている
“seminar” “tutoring”という授業システム

7

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」
事後アンケート

高等教育研究開発推進センター

このアンケート結果は、来年度の改善資料として用いますので、ご協力をよろしくお願い致します。なお、結果がそれ以外の目的で用いられることはありませんし、個人情報が特定されることもありませんので、安心してお答え下さい。

お名前： _____

ご所属： _____ 研究科 (1.修士 2.博士) 課程

以下、番号にはもっともあてはまるものに1つ〇をつけ、カッコ内は自由に記述してください)

問1 本研修への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない
2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

その理由をお書き下さい。

問2 プログラムについてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった 4. まあまあ有意義だった 3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった 1. まったく有意義ではなかった

- | | | | | | |
|---------------|---|---|---|---|---|
| (1) グループ討論・ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| (2) ミニ講義・ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| (3) ボディー・ワーク・ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。